

# 和紙 だより

—越前和紙への提言—



## ■Jörg Gessner (ヨルグ・ゲスナー)

1967年、ライン河畔リュースハイム生まれ。ステューディオ・ベルコ・ファッションスクール(パリ)卒業後、ファッション、インテリア関係のテキスタイル、メンズファッション、アクセサリーのデザインを手掛ける。2004年より本格的に照明デザインに取組み、和紙を積極的に取り入れる。2006年、仏政府の「壁の外のヴィラ・メディス」助成金を受け、和紙の文化研究のため越前にも滞在。パリ、ミラノなどで個展を開く一方、2008年、越前の産地問屋杉原商店と共同開発の「漆和紙UruWashiシリーズ」のステーションナリーや照明器具を発表。パリ、フランクフルト等の展示会で好評を得ている。

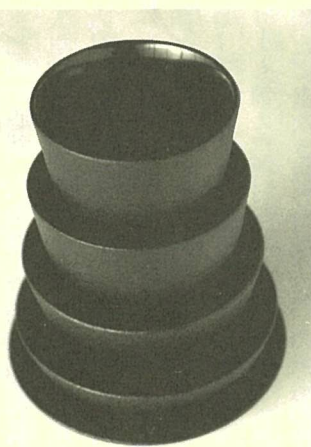
<http://www.joerggessner.com/>

■ヨルグ・ゲスナーさん(デザイナー)  
「静謐さ、持続可能性、精神性が和紙の魅力」

### ●美しい紙を求めて

私はドイツ人ですが現在二十年近くパリを拠点に仕事をしています。十代の頃から文化交流が重要だと考え、自国だけに留まらず、アムステルダム、パリ、ミラノで暮らしました。最後にパリに腰を落ち着けようと思ったのは、ここが南ヨーロッパと北ヨーロッパの文化の重要な交差点だと思えたからです。

子供の頃、イサムノグチの照明器具を見て美学的なショックを受けました。その物静かな美しさに深く心を打たれたのです。三十年後、自分で照明デザインをやり始め、そのための紙を



和紙の入れ子容器

探し求めていくつかの見本市に行き、ヨーロッパ中の紙の見本をたくさん取り寄せました。でも、いずれも固すぎたり、厚すぎたり、破れやすかったり、すぐに劣化したりして、私のニーズを満足させるものはありませんでした。和紙を見つけた時、影と光の本物の深い美しさに魅了されました。

私にとって和紙の魅力は、技術的には、高い光透過性と素材の強さ、視覚的・触覚的な質の高

さを兼ね備えたところです。少し芸術的な表現をすると、流れ行く時間の「かけら」を見るような感じで、それはまるで、漉く職人の心が現れているようにさえ思えるのです。和紙職人の動きが和紙の繊維と一体となり、繊維は流れて渦となり指紋の様な痕跡を留めるのです。漉く職人が違えば紙も全て違っていて、それぞれに大変個性豊かな和紙が生まれます。

### ●フランスでの紙

紙に対するヨーロッパ人のイメージというものを理解するには、それがこの地にどのようなように伝えられたかを知ることが重要でしょう。紙は二五〇年頃、第七期十字軍でアラブ人に捕らえられた貴族によって、初めてフランスに紹介されました。彼らはアラブの紙漉き水車小屋で強制的に働かされ、数年後に解放された人達でした。フランスに戻って、紙漉き小屋をオープンし、紙の製造を開始しました。しかし、手書きで写す本作りが、印刷によるものに替わるまでの約二五〇年間は、紙は依然高価なものだったのです。中世では、本は僧院の僧侶によって主に羊皮紙に、ラテン語で写されました。羊皮紙に替わり、紙の上に印刷する技術の発達によって、より多くの本がより安く手にはいるようになりました。同じ頃新しい宗教が現れ、人間主義的な知識人がフランス語でこの考えを広めました。これがカトリック教会の怒りを買う、多くの知識人と印刷業者が長期間に亘って迫害されました。又、印刷された紙は、製造コストが安いということで、布の代わりに使われていました。ですから、人々の考え方の中には、紙はまだまだしつかりした素材の代用品だという考えが残っています。ヨーロッパで

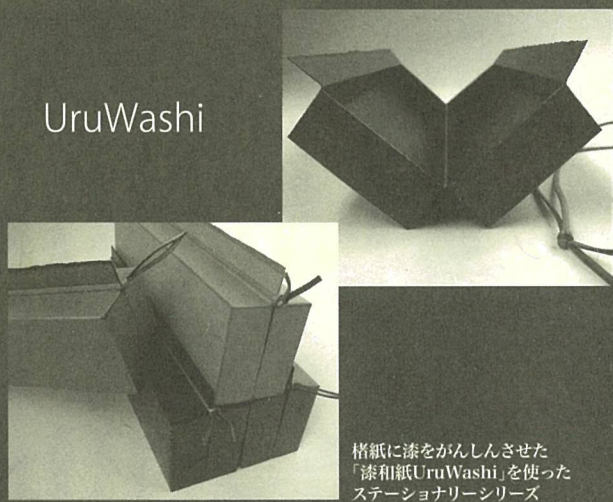
和紙が好きの人というのは、教育程度の高い人で、現代的で意識的にも開けた人が多いです。ですから、ヨーロッパの人々に日本の和紙の価値を知ってもらう時に重要なことは、和紙の持つ深い精神的な価値と持続可能なエコな素材であること、高品質であることを教えることです。

フランスでは最近、日仏交流五百年で、日本のデザインや文化を扱った多くの展覧会が開催されました。だから、良い和紙を紹介するには大変良いタイミングだと言えるでしょう。

### ●越前と開発した商品

私の越前和紙の印象は、不思議な事に全く相反する言葉で言い表すことができます。つまり、伝統的/現代的、明/暗、きめ細かい/荒い、地味/カラフル、柔らかい/強い、などです。杉原商店との今回の「メゾン・エ・オブジェ」フェアに

UruWashi



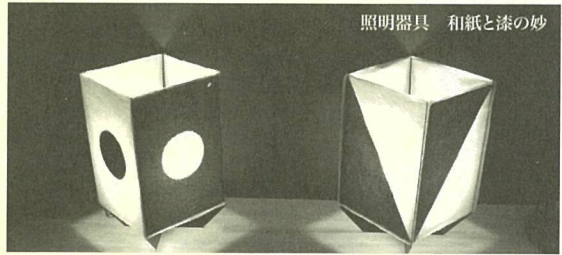
楮紙に漆をがんしんさせた「漆和紙UruWashi」を使ったステーションナリーシリーズ

■紙文化を大切にしたい総合和紙店  
「楽紙館」



博物館の一角でお話を伺った会長の  
上村芳蔵さん  
<http://kami-kyo.to/>

出展した製品のコラボのきっかけは、私が最初に日本を旅した三年前に遡ります。杉原さんと会う度毎に、私には常に新しい紙の発見がありました。私は出会った紙の自然な美しさに深く圧倒され、そしてそれが私の人生の転換点となったのです。それ以来私は杉原商店に和紙を注文し続けており、フランスでは、何故この紙で作品を作るのかを周りの人に熱心に説明しています。



照明器具 和紙と漆の妙

昨年のフランクフルトでのアンビエンテ

フェアで、私達は再会し、その時初めて杉原さんのために照明器具をデザインしました。その後越前に行った時、私達はさらに幾つかのまとまった作品群を一緒に実現しようということになり、「漆和紙 UruWashi」を使ったステーションナリーや照明器具を開発したのです。杉原さんが材料を開発し、私はシリーズの造形、付随するアクセサリー類、それらのデザインの一貫性を探究しました。大変なハードワークとなりました。

私のデザイン意図は、いつも選択した材質の自然な美しさをできるだけ引き出し、余りこねくり回さないということです。シンプルなもの返って作るのが難しいのですが、和紙の静謐さ、持続可能性、精神性で人々の心をつ打つことができれば、自ずと市場への道も開けてくると思っています。(商品販売元 杉原商店)

京都の中心部、三条通の京都文化博物館内の人気和紙店「楽紙館」(文博店)は、二〇〇八年六月、博物館から数分の本社「上村紙(うへむらかみ)株式会社」隣に、五階建の新店舗(本店)をオープンした。店舗の他に博物館や書籍コーナー、紙の文化教室、手漉き工房、ギャラリーも備えた西日本でも最大級の和紙の総合店だ。二階吹き抜け空間には、和紙造形作家の伊部京子さんのモビール、堀木エリ子さんの壁面和紙照明、彫刻家富樫実さんの照明器具などが並ぶ。日本の紙文化をこよなく愛し、和紙業界に人脉も多い、会長の上村芳蔵さんにお話を伺う。

●文化博物館内に一号店開業

楽紙館の母体となる「上村紙(うへむらかみ)株式会社」の創業は明治四十五年。家庭紙の



五階建の新店舗

商いから始めた同社は、文庫紙などの呉服関連の和紙を扱うようになる。当時のお得意さんは九十%までが呉服屋さんで、中京区との界限には呉服屋が集中していたという。和紙を包む紙は、たとう紙(畳紙)貼紙)又は、文庫紙(ぶんこがみ)と呼ぶ。文庫紙というとは、何か文物を包む紙のようにも思える呼び方だが、当時京都では「小袖文庫紙」とか「衣装文庫紙」といった。文庫紙は勿論今でも販売しているが、上村紙の現在の扱ひ品目の主流は、チラ



源氏物語の絵巻54帖が揃う文庫紙コーナー

シ、DM、宣伝用の和紙風の印刷用紙とのこと。従業員は、本社・楽紙館合わせて約三十人。

一九八八年、平安建都千二百年記念事業で創立された京都文化博物館の一階テナントが募集された際、上村紙も手を挙げた。テナントの選考は厳しいものだったが入ることができ、「紙を愛し、紙を楽しみ、紙の未来を考える」という願いを込めて「楽紙館」と名づけた。それ

までもにも書道用紙などの店はあったが、人形作り、ちぎり絵などの趣味に使う京都らしい友禅や染め紙も扱うと共に、和紙や京都関連の書籍コーナーも充実させた。「大量生産の紙はあまり入れたくなかった。個人的にいいアイデアを入れ込んでいる紙や趣味の味わいのあ

る紙、作家的な紙を主体にして品揃えしたかったので、眼鏡にかなうような紙を探すのが大変でした」と上村さんは開店当時の苦労を振り返る。

●源氏物語シリーズの和紙製品

楽紙館はユニークなオリジナル商品を開発している。源氏物語にちなんだ絵柄がゆかしい一筆箋、便箋を始め、王朝継ぎ紙、懐紙、絵はがきなどである。文博店の開店がきっかけで、和紙人形の先生方と懇意になっていくに従って、彼女たちの多くが源氏物語を題材としており、物語をよく知っていることに驚いた。教室では、当たり前のように「玉鬘」「明石」などと登場人物の名前が飛び交う。日本を代表する源氏物語の道に入らずして、和紙が語れようか、との思いがこのシリーズの開発に繋がった。絵柄は、絵描きさんにオリジナルで起こしてもらった。和紙見本帖「王朝のそめいろ」「かさねのきぬいろ」では、源氏物語に出てくる当時の色を工業試験場に協力を仰ぎ再現した。「光源氏の恋文」という商品は、王朝継ぎ紙の第一人者「近藤富枝先生の監修の元、物語に出てくる恋文の色重ねや唄をも解説した薄紙紙のレターセットなのだ。着物の文庫紙、一筆箋はがき、和紙人



解説付きのものもあるオリジナルの源氏物語関連商品

形のキットなどは、五十四帖すべて揃っているというから驚く。とにかく開発に手間暇がかかっているシリーズである。昨年は源氏物語千年紀で話題となったが、未永く売っていきたいと上村さんは言う。日本文化の中心地・京都で、日本文化を代表する源氏物語や和紙に触れて欲しいと、体験型観光企画も進行中だ。

### ●二千年紀和紙總鑑事業

楽紙館は、日本の和紙を全て集めた和紙の集大成「二千年紀和紙總鑑」事業の事務局でもあり、上村さんはこの事業のいわば言い出しっぺだ。遡ること一九九九年、ロンドンで大々的な日本の和紙展を開こうと十年がかりで準備していた和紙委員会に、資金難で開催できないとのファックスが入った。余りのことに関係者一同驚いたが、それなら、二〇〇〇年という節目に日本の和紙をすべて集めてコレクションを作ろうとなった。すぐに実行委員会が組まれ、名誉会長に千宗室さん、実行委員長には越前の石川満夫さんをお願いし、十数人の和紙委員会が結成された。二年かかって総点数二五〇点の紙を集め、材料、作者、故事来歴、英文説明を付けた。難航を極めたこの一大文化事業は、本年やつと完成する。全十二巻の構成は、手漉き和紙編上六巻、手漉き和紙加工編二巻、機械漉き和紙編三巻、研究・技術資料編一巻となり、頒価は三十五万円。「今、和紙の生業は減少の一途をたどっていて、編集している間にも、後継者がいなくて紙がなくなってしまう所もあります。この和紙總鑑はその意味からも後世の人にも残せる、世界的にも大変貴重な資料となります。予約すれば割引がありますので、どうぞよろしく(笑)」と上村さんはつこり微笑んだ。

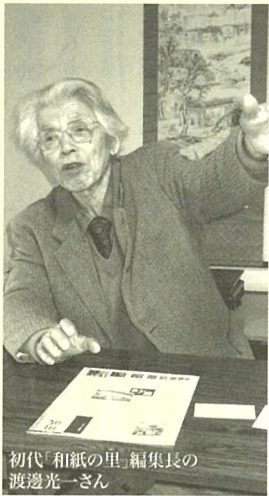
### 取組紹介

#### ■郷土の紙にこだわり続けて三十八年 「越前和紙を愛する会」

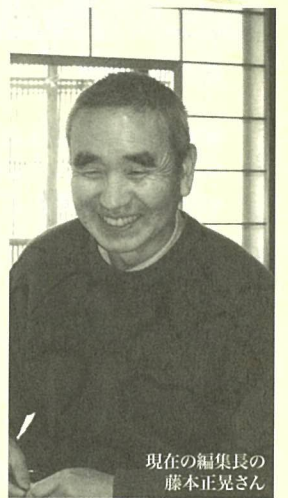
#### ●発足と会報誌創刊

昭和四十六年、当時の中川平太夫福井県知事が「文化のふる里づくり」事業構想を提唱。県下の各市町村に補助金を交付し、特色ある文化事業を企画・事業化することを推奨した。田楽能舞伝承地の池田町は「能楽の里」、三好達治、高見順などを輩出している三国町は「文学の里」、日本六古窯の二つ、越前焼発祥の地、宮崎村は「陶芸の里」と次々と手を挙げる中で、今立町の「和紙の里」構想は認定第一号となった。折良く人間国宝の認定を受けた八代目岩野市兵衛氏を初代会長に「越前和紙を愛する会」が発足。越前和紙の歴史あるものづくりを全国に発信すると共に、近隣の漆、打刃物、陶芸、繊維、などの生産技術文化圏との相乗効果を狙う意図もあった。

年一回発行の会報誌「和紙の里」は、昨年で三十号を数える。創刊号から二十九号まで編集長を務めた渡邊光一さんは、元は南越中学校の美術の教員。同中学校長の斉藤岩雄氏は、歴史ある郷土の和紙や市兵衛さんに触れるに従って、この世界にのめりこんだ。社会科、国語の教師にも呼びかけて、和紙古文書の研究会



初代「和紙の里」編集長の渡邊光一さん



現在の編集長の藤本正晃さん

資料目録作りや和紙漉きクラブなどを誕生させ、ついには「越前和紙のはなし」という文化解説書まで出版してしまったそうだ。

「当時、今立町は隣の武生市の五分の一にも満たない小さな町でしたが、学校の先生が地域社会によく貢献してくれました。人材も豊富で、文化的な素地があり、気概もあった」と渡邊さん。しかし、産業振興のための「いわばそろばん勘定を」「和紙の里」発行のもくろみとしていた県からの補助金は三年で打ち切り。その後数年間は今立町が肩代わりをしてくれた。その時、今立町役場に勤めていたのが、現在の編集長の藤本正晃さん。現在は長宝寺という寺のご住職でもある。

#### ●中身の濃い会報誌

編集方針は、そろばん勘定よりも文化の視点でアピールする方が、越前和紙の振興にはよいという理解が編集担当者間で高まり、それ以降「和紙の中の和紙」「日本を代表する和紙」を強調して訴えることにした。毎月テーマを設定したいわば特集主義だったから、企画が最も重要だった。県立美術館で横山大観の大々的な記念企画展が開催された年の二九号は、「岩野平三郎と近代日本画の巨匠たち」を特集。独自の筆勢や発色を具現化する紙を要求する画家と紙匠の書簡に現れたやりとりを紹介し、「画家と紙漉き」という視点か

ら近代日本画のもうひとつの物語を記事にした。平成元年の十四号では、日本の紙幣の道を開いた越前和紙を特集。同年開催された「IMADATE展」の入場券をかつての繋がり深い大蔵省印刷局に依頼するという突飛なアイデアも実現し、越前和紙の名は急速に知られるようになった。藤本さんは「まあ、とんでもないことを考えつくのがこの連中で、印刷局でこんな小さな町が入場券を印刷させて、イベントの費用を捻出したということとで話題になり、役所の電話は鳴りやまなかった」と愉快そうに笑う。この会報誌は、また毎号テーマに則した表紙写真と紙見本を巻頭頁に付けるのがみそで、考証して復元した紙もあり、今では大変貴重な生の紙資料となっている。その他にも、海外の紙コレクション記事、紙シンポジウムや研究会動向、郷土史の中の紙、職人列伝など多彩な記事が取り上げられ、執筆陣の中には、作家の水戸勉氏、和紙研究の森田康敬氏、柳橋眞氏の顔も見える。冊子の印刷代以外は全て手弁当でやってきたという。



越前和紙を愛する会、現会長の石川満夫さん

#### ●物づくり、事づくり、人づくり

「この四号ほど、明治の変革者というテーマで、明治期の近代化に伴うこの産地の動きを追っています。おじいさんが生きていた頃にちよつと聞いたり、資料に出てきた名前なども

何年か後の資料にはすぐに出てこなくなる。明治からあとの話が歴史の中で抜け落ちていくのが残念で、掘り起こしています。やはり記録するということは、あとから教訓やヒントを頂く意味でも、基本的に大変重要なことです。「歴史から学び、生業を引き継ぎ、支えるだけでなく、次の時代のテーマを仕掛けていく」物づくり、事づくり、人づくりもこの会の大切な役割ですから。」と現在の会長の石川満夫さんは語る。

といつても、編集委員が高齢化している昨今、会では若手を育成しようと、今年から「越前和紙千年ロマン講座」という連続講座を始めた。第一回は、二月二十一日、映画「越前和紙」を制作した著名なドキュメンタリー映画監督、民族文化映像研究所所長の姫田忠義さんをお招きし、海外に越前和紙を紹介することにも一役買った作品「神と紙の郷のまつり」の上映会とトークが行われ、熱気あふれる研究会となった。



第一回越前和紙千年ロマン講座の様様-2/21

最新の30号。次号は過去の優れた記事の抜粋号の予定

「越前和紙を愛する会」の入会案内詳細は:

<http://www.echizenwashi.jp/information/magazine.html>

### 洋紙から発想のヒントを

三月五日、名古屋市熱田区の和紙ショップ「紙の温度」で、全国手すき和紙連合会の研修会が開催され、元特種製紙研究所員で現在、製紙研究所「宍倉ペーパー・ラボ」を主宰している宍倉佐敏氏から「洋紙から見た和紙あれこれ」と題した講演があった。

講師の話に熱心に聞き入る参加者達



宍倉氏は繊維分析の視点から、和紙と洋紙の製紙技術の歴史を概観し、和紙技術の優れた点を解説。実はこの優れた和紙の性質を研究し、いくつもの洋紙が開発されたことを紹介した。氏はその上で、現在和紙が抱える問題点として、和紙に基本的な規格がないこと、価格のヴァリエーションが少ないこと、紙漉きの人に素材や加工処理の化学知識が乏しいこと、研究開発力が乏しいこと等を指摘。問題解決には、人々が和紙に触れる機会を増やし、和紙の耐久性を活かした用途開発、ニーズを的確に掴まえる流通との共同研究開発、付加価値を生む後加工の重要性等を訴え、今度は洋紙の方法論を和紙に活かすべきだと締めくくった。明日の素材開発のヒントを探ろうと、全国から集まった四十三名の参加者の中からは、熱心な質問が出された。

## 情報欄

### ●イベント情報

#### ■神と紙のまつり(大掘り出し市)

時:2009年5月3日(日)~5日(火)

場所:和紙の里通り(越前市新在家町)

#### ■大瀧神社・紙祖神 岡太神社 式年大祭

時:2009年5月2日(土)~5日(火)

場所:岡太神社・大瀧神社(越前市大滝町)

#### ■全国植樹祭展示

時:2009年6月7日(日)

場所:朝倉遺跡 武家屋敷

#### ■越前和紙工芸土展

時:2009年6月6日(土)~7月27日(月)

場所:卯立の工芸館(越前市新在家町)

#### ■金沢ペーパーショー

時:2009年6月19日(金)~21日(日)

場所:石川県産業展示館(展示・体験あり)

### 33年ぶりの式年大祭



お祭りの  
主会場となる  
大瀧神社境内

ゴールデンウィークに毎年開催される「和紙の祭り・神と紙の祀り」は今年も、特別なお祭りとなります。33年毎に行われる御開帳(式年大祭)は、紙祖神・川上御前の祭りとして1300年にわたり続いており、今年で39回目。大瀧神社では、日頃見られない御神体やご仏像も一般に公開され、5月5日には子供達による「浦安の舞」奉納の後、クライマックスのちょうちんを掲げた幻想的な神送り「お上がり」の儀式が行われます。車は入れませんので、ご注意を。

### 編集後記

ローザンヌで2月、2016年夏季オリンピックの開催を目指す東京の招致委員会が計画をまとめたファイルをIOCに提出しました。書類・資料は和紙にオフセット印刷し、ふろしきに包んで持参したそうです。和紙は、やはり日本を代表するアピール度の高い国際品なのですね。(よ)

季刊・和紙だより 第22号(2009年春号) 発行日:2009年3月31日

発行人:福井県和紙工業協同組合 山田益弘 〒915-0234 福井県越前市大滝町11-11 TEL:0778-43-0875 FAX:0778-43-1142

編集所:右衛門佐美佐子事務所 〒606-8225 京都市左京区田中門前町90 TEL:075-712-8834 FAX:075-702-6223 E-mail:m-yomosa@smail.plala.or.jp

編集人:右衛門佐美佐子・田中裕子

※無断での転写・転載はお断りします。